

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 最優秀賞
(国土交通大臣賞)

「 私たちを守る砂防ダム 」

愛媛県 松山市立道後小学校 5年 ^{きたち} ^{みなみ} 北地 菜々美

令和5年7月1日深夜2時21分、聞きなれない音が鳴りひびき、私はとび起きた。緊急速報メール。愛媛県土砂災害警戒情報警戒レベル4の知らせであった。外はバケツをひっくり返したような音という表現がふさわしい恐ろしさを感じる雨音であった。ニュースを見ると、石手川が氾らんする水位に達しているという。まだみんなが眠っている時間、そして大雨が降り続けている中の避難指示。テレビやネットから情報収集するしかなく、家から動けずにいた。

夜が明け、母が言った。

「うちの山はどうなっているのだろう。」

私の家族は石手寺の裏山、常光寺町でみかんを作っている。昔、地すべりがあった地ばんが弱いと言われている山。母は幼い頃から、祖父母や曾祖父母から聞かされていることがある。

「大雨が降ったあとは、山へ近づくな。」

周囲の山の人たちも、どの人もみんな同じ言葉を言う。命を守るために、昔から語り継がれてきた言葉なのだ。祖母に地すべりした当時のことを聞いた。30年以上前、松山市に300ミリを超える大雨が降り、近所の橋は流された。祖母の山のとなりの園地で地すべりが起きた。倉庫は流され、長年大切に育ててきた伊予柑の木が倒された。雨がやんでも、しばらくは何もやる気が起きなかったそうだ。母とおばは土砂災害の経験はないが、語り継がれているこの言葉を信じ守っている。

この地に15年前、砂防ダム建設の話が挙がった。祖母は砂防ダムができることで、もし自分の山が崩れたとしても、下の集落へ土砂が流れる危険が少なくなると安心したそうだ。砂防ダムは、水の力で土砂がけずられたり、大量の土砂が下流に運ばれるのをおさえ、土石流や流木を受け止めるはたらきがある。みかん山に行く途中に不透過型砂防ダムがある。これまで山の手伝いで何度も砂防ダムのそばを通過してきたのに、勉強をして改めて見ると見方が全く変わった。地形や土砂の流れを考りよして作られた砂防ダムはどっしりとかまえており、土砂災害から守ってくれる安心感を覚えた。先日の大雨の時も、上流からの土砂や倒木を砂防ダムが受け止めていることを確認できた。

土砂災害から人命を守るためには何が必要か。大雨が降った時、気をつけていることを家族に聞いた。水路を流れる雨水をまず確認するそうだ。水はにごっていないか、今まで大量に流れていた水が急に減っていないか。そして遠くで倒木の音や今まで聞いたことのない音はしていないか、ゴゴゴと音を立てて流れる水音以外の音にも注意を払うらしい。次に、臭い。土臭い、臭いがないか確認するそうだ。これも語り継がれてきた土砂災害から身を守る防ご策。これに加えて、砂防ダムや溪流保全工、山腹工など防ぐ施設が大きな役割を果たすと感じた。

大雨のあと点検のため山へ行く時、母はいつも私と弟をぎゅっと抱きしめる。これまでどうしてだろうと思いつつ確認してこなかった。砂防ダムを見ながら母が

「大雨のあとは、いつ地すべりがあるか分からないと思って山へ出かけるのよ。これで子どもたちを見られるのは最後かもしれない、と思って抱きしめるのよ。」

母のこの言葉を聞いた時、より土砂災害の恐ろしさを痛感した。いつも危険を感じながら仕事をしなければいけない環境はあってはならないと思った。私は土砂災害の経験はない。しかし、学ぶことはできる。昔の人の教え、土砂災害を防ぐ施設について、もっと研究し知っていきたい。山で働く人、また、そばで暮らす人が安心して過ごせるよう、日頃からアンテナをはりめぐらし正しい知識を身につけ、発信していける力をつけたい。